情報モラル教育　会津若松市立湊小学校

キーワード：自分事、理解と行動との乖離、「自覚」から「自律」を促す、小中連携

Ⅰ　研究について

1　情報モラル教育に関しての学校課題

家庭におけるアンケート調査の結果から、本校の児童の９割以上の児童が、インターネットを利用できる情報通信機器（スマートフォン、パソコン、ゲーム機等）を所持している。また、会津若松市の取組である「あいづっこ『携帯・スマホ等の使い方』宣言」の実践から、情報通信機器の利用における家庭のルールを決めている家庭は６割以上と昨年と比べて増えてきている。しかし、約４割の家庭でルールが決められていないことや、ルールを決めても守れていない（インターネットの長時間利用、不適切な情報の獲得）といった課題が挙がっており、保護者の情報モラルに対する意識の見直しも必要である。さらに、児童自身がタブレットやスマートフォン等を正しく、安全に利用するための指導の必要性が高まっている中、ICT の活用に抵抗がある教員もおり、ICT の適切な利用などといった情報モラル教育についての指導が十分ではない。

これらのことから、児童が情報通信機器の利用に関するルールを理解するとともに、状況に応じた適切な判断力を身に付けさせていくために、教員が積極的な ICT の活用を図ることが必要である。さらに、道徳科や学級活動を中心とした児童の実態に応じた情報モラルの授業を実践していく必要がある。さらに、学校と保護者が同じ視点で指導できるようにするために、情報共有できる場を設定していかなければならない。

2　実践概要（授業実践、授業研究会等）

時　期	実　施　内　容
６月２日	第１回　校内研修「学習端末の使用方法」について
７月10日	第１回　情報モラル講演会（教職員対象　湊小中学校合同開催） 講師：ふくしま情報モラル教育アドバイザー 静岡大学教育学部准教授　塩田真吾様
７月14日	情報モラルアンケート①の実施（児童・保護者）
９月29日	校内授業研究会　第２学年　学級活動 指導助言者：ふくしま情報モラル教育アドバイザー 静岡大学教育学部准教授　塩田真吾様
10月４日	湊中学校　第１回　授業研究会への参加
10月10日	地区別研修会①（会場：磐梯青少年交流の家）
11月10日	第２回　校内研修「Google jamboardの活用方法」について
11月27日	湊中学校　第２回　授業研究会への参加
11月28日	校内授業研究会　第２学年　道徳科 指導助言者：ふくしま情報モラル教育アドバイザー 静岡大学教育学部准教授　塩田真吾様
12月６日	情報モラルアンケート②の実施（児童・保護者）
12月14日	情報モラル　授業参観（全学級実施）
１月25日	地区別研修会②（オンライン）
２月中旬	情報モラルアンケート③の実施（児童・保護者）

Ⅱ　研究の実際

1　研究授業及び校内授業研究

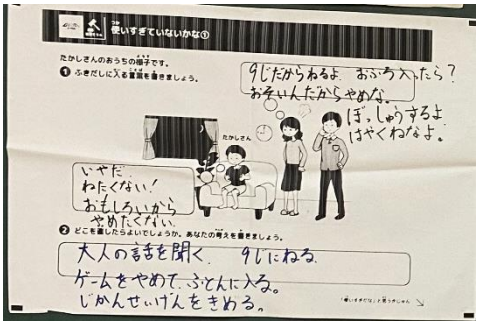
本校では、情報モラル教育の指導において第１回情報モラル講演会での塩田先生の話を踏まえ、「怖がらせるだけの指導からの脱却」「自覚させ、自律を促す指導」をテーマに研究を進めた。そこで、活用形情報モラル教材「GIGA ワークブック（LINE みらい財団、静岡大学塩田研究室、共同開発）」を参考にしながら、道徳科と学級活動で研究授業を行った。

（１）第２学年　学級活動（２）「使いすぎない使い方」

事前アンケートの結果から、児童の情報通信機器の長時間利用が課題だと分かった。「使いすぎ」となる時間について友だちと比較し、話し合う活動を通して、「使いすぎ」の基準が人によって違うことに気付き、自分の生活に合ったルールを意思決定することを目的とした授業を行った。

①　イラストの場面を自分に置き換えて考えさせる。

情報通信機器の長時間利用に関する教材を用いて、イラストの男の子の心情を自分に置き換えて考えさせることにより、自分自身の生活における情報通信機器の「使いすぎ」について振り返り、「使いすぎ」となる時間について考えるという本時の課題をつかむことができた。

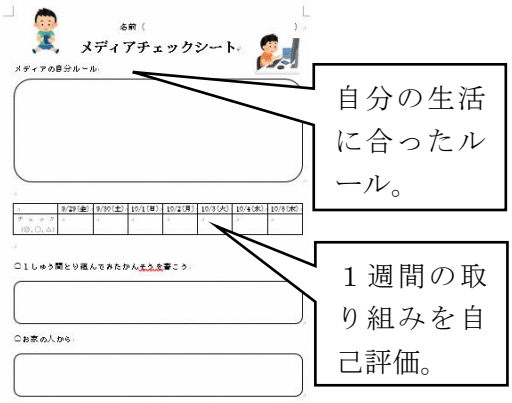


②　「時間シート」を用いて意見を可視化し、話し合わせる。

「使いすぎ」だと思う「時間シート」に名札を貼ることで、自分の意見を可視化してから、理由について話した。選択した時間が個々によって違ったことと、児童それぞれにその時間を選んだ理由があったことから、「使いすぎ」だと思う時間は人によって違うことに気付くことができた。

③　ワークシートで自分の生活に合ったルールを考えさせる。

保護者回答のアンケート結果を示し、家庭のルールがあるのにも関わらず、守られていない人がいることが分かり、「50 分をタイマーで計って使う。」や「1 時間使ったら、家のお手伝いをする。」など、自分の生活に合った達成できそうなルールを考えることができた。ワークシートで、１週間の取組がチェックできるようにしたことで、後日の振り返りにも活用することができた。



④　事後研究会による指導助言の先生から

本時では、保護者回答のアンケート結果を児童が見たことから、課題を「自分事」として捉えることができた。しかし、導入の段階で「自分事」として捉えるレベルを上げる必要があり、そのためには、よくないと分かっているのにやることができないという「理解と行動との乖離」について考えさせるとよい。例えば、「ゲームを長時間やってしまうときはどんなときか」と場面を想像させることで、「自分事」として考えるレベルを上げることができるとご助言いただいた。

（２）第４学年　道徳科　「自ら信じることにしたがって」（善悪の判断、自律、自由と責任）

本教材の「カマキリ」は、主人公がインターネットを用いた調べ学習の際に、自分の判断は正しいと思いながらも、周りに流されて個人情報を入力してしまい、自分の行動に後悔の念を抱いてしまうという内容である。

役割演技を通して登場人物の言動について考えさせることで、自分が正しいと思ったことを実行する難しさを感じさせ、「自分事」として考えさせる。できた自分もできなかった自分も認め、そこから自分と向き合っていこうとする態度を育てることを目的とした授業を行った。

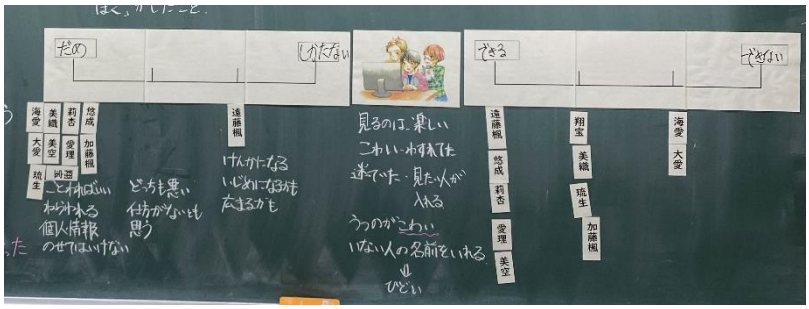
①　実体験をもとに考え、児童の問題意識を高めさせる。

事前アンケートで「正しいと思ったことをするのは大切」は、１３人中１２人が「はい」と答えた。しかし、「正しいと思ったことはいつでもしている」の質問では、「している」が４人、「ほとんどしている」が５人、「あまりしていない」が４人と３つの回答に分かれた。このアンケートの結果を電子黒板に映して提示することで、児童は正しいと分かっていても実際に行動に移せていないという「理解と行動との乖離」を知ることができ、道徳的価値に対する問題意識を高めることができた。

②　教材の場面に近い状況での役割演技によって、登場人物の心情を感じさせる。

教材の場面に近づけるために、名前を入力することができるサイトを提示し、実際に役割演技で使用した。検索をするときの楽しさと個人情報を入れる怖さ、友だちの誘いを断る難しさを感じ取ることができ、個人情報を入れることはいけないと分かっていても、入れてしまうかもしれないと、話合いの中から考えを深めることができた。

③　「心のものさし」から自分たちの心の状態を可視化させる。



教材文を読む前と、読んだ後で「正しいと思ったことをいつでもできるか」について「心のものさし」で可視化したことにより、児童自身が心の状態を客観視することでき、心の変化もわかった。役割演技を行ったことで「自分事」として考えることができ、正しいとわかっていることを実行することの難しさを感じながら、終末の感想では、「迷うと思うけど勇気をもって行動できるようにしたい」と答える児童がいた。

④　事後研究会による指導助言の先生から

主人公の気持ちを「自分事」として実感させる体験や、可視化などの工夫がされていた。授業者が児童の「自信のなさ」や「難しさ」に寄り添うことで、本音を引き出すことができていた。役割演技で本音を引き出したことで出てきた、「自分の名前ではなく友だちの名前を入れる」ことには、友だちの名前を入れるとどんなことが起こるのか、自分の名前を勝手に使われたらどう思うかなどといった、情報モラルとしての指導が必要であった。情報モラルは、教科の内容だけでなく、日常の行為についてからも教材になりやすいとのことだった。

2　情報モラル講演会

情報モラル講演会【講師：静岡大学教育学部准教授　塩田真吾先生】

湊小学校と湊中学校の教職員を対象に「１人１台端末環境での情報活用能力としての情報モラル教育」というテーマで講演をしていただいた。

○「情報活用能力」の「情報モラル」について

「情報活用能力」には、「情報を上手に活用する力」と「情報のリスクに対応する力」が求められており、今日の情報モラル教育は、「情報のリスクに対応する力」の育成が重要視されている。そのためには、「怖がらせる」だけの指導から脱却し、「自覚」させ、「自律」を促す指導を行っていく必要がある。

○情報モラルの指導上のポイントについて

情報モラルの指導のポイントを助言していただき、指導に有効な教材についても紹介していただいた。

- 「コミュニケーション」のトラブルについては、トラブルへの自覚を促し、自分事として捉えさせること。
- 「個人情報」のトラブルについては、リスクの見積もり力（危機予測）を高めさせること。
- 「使いすぎ」のトラブルについては、24 時間の使い方を見直し、タイムマネジメント力を育てること。
- 「情報モラルの時間の確保」については各教科内においても短時間でもいいので情報モラルについて指導する機会を設けること（「ＧＩＧＡワークブック」の活用）。

３　情報モラル授業参観（全学級）

保護者が一緒に考えたり、活動に参加したりする場を設けた。

第１学年 学級活動「つかいすぎていないかな」

メディアの「使いすぎ」について考え、これからの関わり方について考えた。

第２学年 学級活動「自分とあい手のちがい」

言葉や場面は、人によって感じ方が違うことについて考えた。

第３学年 学級活動「つかいすぎていないかな」

「使いすぎ」や「適切な行動」について考え、家庭のルールについて考えた。

第４学年 学級活動「ゲーム中の友達」

ゲームやアプリの中で出会う顔が見えない人との関わり方を考えた。

第５学年 道徳科「責任ある自律的な行動」

自律的に判断し、責任のある行動をするにはどうすればよいかを考えた。

第６学年 学級活動「使いすぎていないかな」

「使いすぎ」や「適切な行動」について考え、家庭のルールについて考えた。

わかば１組　道徳科「責任と規律ある行動」

責任と規律ある行動をとろうとする道徳的実践に向け、意欲を高めた。

全学年で「情報モラル」をテーマにした内容を取り上げた。情報通信機器の使用時間を振り返る授業や、周囲や相手の状況を踏まえた行動の仕方について考える授業を、学年の実態に応じて行った。保護者に参観していただくことで、家庭で情報通信機器に関するルールを話し合う際の 1 つの判断基準としていただいた。

Ⅲ　成果と課題

1　成果

○　教員自身が ICT を意識して活用することで、授業で ICT を活用する機会が増えてきており、情報モラルの指導充実にもつながった。

○　湊小学校と湊中学校が次年度から義務教育学校になることから、９年間を見通した情報モラル教育が進んでいる。「Google ドライブ」を活用することで、より密接な情報共有ができるようになった。

○　情報モラル講演会を通して、教職員自身が情報モラルの基礎を学ぶことができた。「怖がらせるだけの指導からの脱却」「自覚させ、自律を促す指導」を意識した指導及び授業が見られるようになった。

○　「ふくしま情報モラル診断」や自校で作成したアンケートの結果から、児童や保護者の情報活用能力を把握し、指導に生かすことができた。

○　情報モラル通信や、情報モラルに関する授業参観を通して、家庭との連携が図られた。

2　課題

- 道徳科や学級活動の情報モラルの授業は行ってきたが、各教科の学習活動の中での情報モラル教育にも、意図的・計画的に取り組んでいかなければならない。
- 小中学校９年間を見通した情報モラルに関する教育課程を、発達段階や教科等横断的な視点も取り入れて作成していく必要がある。
- 情報モラルに関して正しい知識をもっていたとしても、それを実践するためには情報活用スキルも必要であり、それらの指導も併せて行っていかなければならない。
- 情報モラルに関して保護者と連携は取れてきているが、情報モラルに対する認識の差がまだまだ大きいため、今後もさらに家庭との連携を深められる機会を増やしていく。

【引用文献・参考文献・参考 URL】

・　文部科学省（2017）.「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」.

・　文部科学省（2018）.「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）」.

・　塩田真吾・橋爪美咲・香野毅（2020）.「特別な支援を要する子どものためのネット・スキル・トレーニング」.静岡学術出版.

・　藤川大祐（2022）.「考えよう！話しあおう！　これからの情報モラル（全４巻）」.偕成社.

・　一般財団法人 LINE みらい財団.「ＧＩＧＡワークブック」.
https://line-mirai.org/ja/events/detail/68　（参照 2024-2-20）.